ピュテアスとトゥーレ

織田武雄

〔要約〕 マッサリアのピュテアスは、科学者としてもすぐれていたが、彼の最も大きな業績は、アレクサンドロス大王のインド遠征と略同時代に、彼がギリシア人にとって殆んど未知の世界であつた北欧に探検航海を試み、新しい地理的知識を加えたことである。彼の航海の目的は、カルタゴ人に対抗して、錫と琥珀の産地への航路を開拓し、また世界の最北の地方を探検することであったが、彼は先ずガリアの大西洋沿岸から錫の産地のブリテン島に渡り、同島を周航し、琥珀の産地であるゲルマニアの北海沿岸を訪れた。さらに彼は北極圏下のトゥーレにまで到達したが、トゥーレはノルウェーの北西海岸に当るものと推定される。またストラボンを通じて伝えられたトゥーレの周辺の幻想的な状況は、種々な解釈が下されているが、濛霧にとざされた海面の凍結状態を示すものと解される。しかし彼によって齎されたトゥーレの知識は、当時の人々には理解し難いものであった為、ポリュビオスやストラボンによって彼は虚言者と非難されたのである。

一

ギリシア時代に於ける地理的知識の発達には、植民時代よりヘロドトスに至る紀元前五世紀頃までの時代と、アレクサンドロス大王やピュテアスによる紀元前四世紀以降の時代と、凡そ二つの時期が区別される。即ち紀元前五世紀頃までにみられたギリシア人の地理的知識は、主に地中海沿岸に於けるギリシアの植民地の発展によつて齎されたものであるから、その範囲は地中海・黒海沿岸を中心として、一部はエジプト人やペルシア人を通じてリビヤやインド、或は黒海北岸に於ける交易によつてスキュティア地方などに及んでいた程度であり、今日ヨーロッパの中心をなしている大西洋沿岸から北海沿岸にかけての地方は、まだ当時のギリシア人にとつては、殆んど「未知の土地（テラ・インコグニタ）」であつた。

もちろん大西洋沿岸に対しては、既に紀元前五〇〇年頃、カルタゴ人ヒミルコ（Himilco）によるアルビオン（Albion

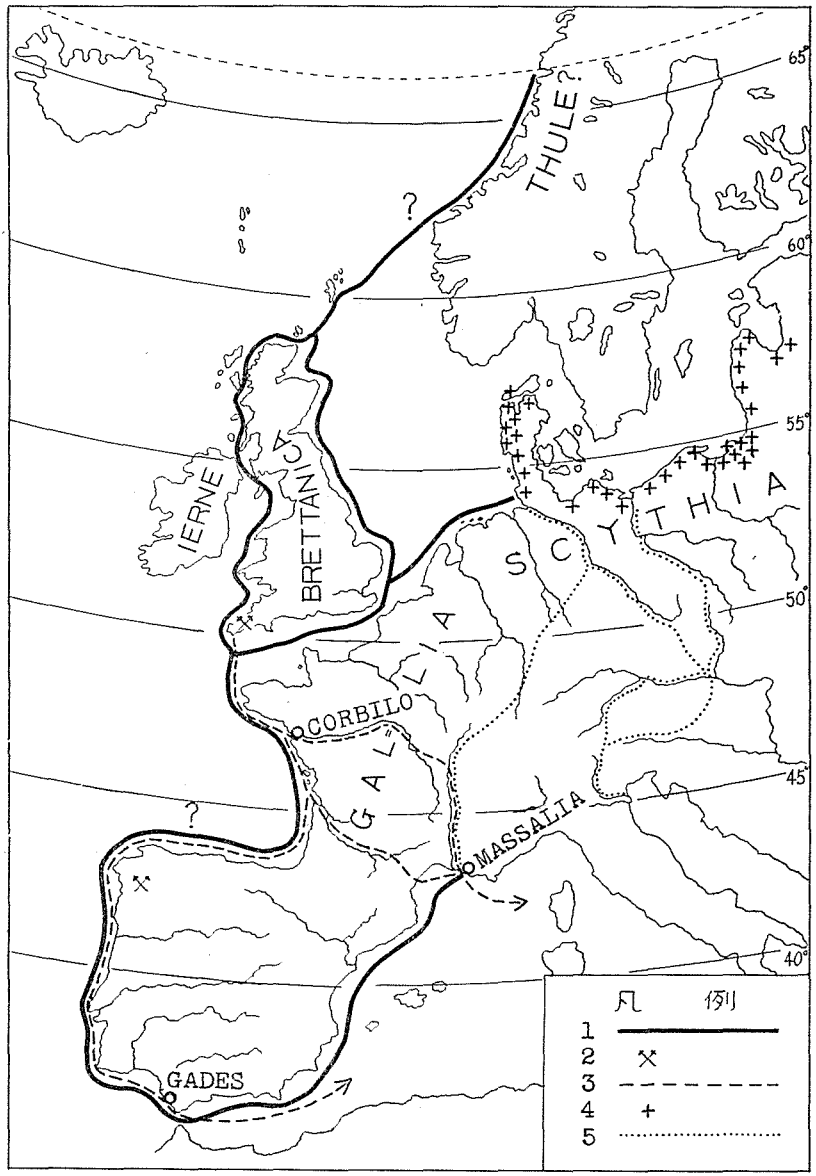
ブリテン島）への航海が伝えられているが、その目的は錫の交易にあつたと考えられる。[1] また北海・バルト海沿岸に産出する琥珀は、有史以前から、エルベ・ライン・ドナウ等の中欧の諸川の流域を通じて、地中海沿岸に輸出されていた。従つて錫と琥珀とは地中海沿岸と北欧とを結ぶ最古の交易品であり、それに伴つて、北欧に関する何等かの知識が伝播されたものと思われる。しかしそれはまだ漠然たるものであつたとみえ、少くともヘロドトスの記すところによれば、彼は琥珀と錫が世界の際涯の地方から送られて来ることは事実であるとしているが、琥珀の産地としてのエリダノス（Eridanos）河、[2] 錫の産地としてのカッシテリデス（Cassiterides）島[3]の存在を否定し、またヨーロッパの北部が海洋を以つて繞らされているか否かも疑問であると看做している。（Herodot. 3. 115）

このように北欧に対するギリシア人の知識は極めて乏しいものであつたが、しかし兎も角も実際の見聞によつてそれが明かにされ、ブリテン島やアイルランドの存在をはじめてギリシア人に伝えたのはピュテアスであり、またカエサルやタキトゥスによつて新しい知識が加えられるまでは、北欧に就いてはピュテアスの知識が唯一のものであつた。この意味に於いて、ピュテアスの北欧への航海は、ギリシア人の地理的知識をインドの方面に拡大せしめたアレクサンドロス大王の遠征と、対比さるべき重要な意義を有しているのである。

① Hennig, R., Terrae Incognitae. Bd. I. 1944. s. 96-107

② ヘロドトスはエリダノス河は北の海に注ぐと記しているが、エリダノスはまたポー河の古い呼称でもある。エリダノスはロダヌス河（ローヌ河）やパレスチナのヨルダン河と同様に、フェニキア語の河川を意味するヤルダン（Yardan）と語源を等しくするものとすれば、北欧の琥珀のアドリア海沿岸の集散地であつたポー河がエリダノスと呼ばれていたのが、ギリシア人の北欧への知識が拡大されるにつれ、琥珀の産地である北欧の河川がエリダノスと呼ばれるに至つたのであろう。

③ カッシテリデスがブリテン島でないことは、ストラボンがカッシテリデスは一〇島よりなり、イベリア半島の北方の海洋中に存在すると記しているが（Strabo. 3. 3. 5）、しかしその位置に当るスキリー諸島には錫を産出しない。従つて錫の集散地であつた今日のブリュターニュ半島のウェッサン島附近がカッシテリデスに当るものと考えられ、ヒミルコのオエストリムニデスも後述の如く、同じ地域を指したものであろう。しかし何れにしても、フェニキア人の錫貿易を対する秘密政策によつて、ギリシア人にとつてはピュテアスの時代まで、錫の産地はよく知



Pytheas の航海と錫・琥珀の産地

1. Pytheas の航路，　2. 錫の産地，　3. 錫の交易路，
4. 琥珀の産地，　5. 琥珀の交易路

られていなかったのである。

二

ピュテアス(Pytheas)はギリシアのホーカエアの植民市、マッサリア(Massalia 現在のマルセーユ)の出身であるが、彼の伝記として拠るべきものはなく、また彼の航海記録と看做される「大洋に就いて」(Τὰ περὶ Ὠκεανοῦ)と題する著作も早くから失われてしまつたので、ピュテアスに就いては、ポリュビオス・ストラボン・プリニウス・ディオドロスなどの著作にみられる断片的な記述による外はないのである。しかし此等の著作はピュテアスよりも三世紀以上も後のローマ時代に書かれたことからみて、ピュテアス自身の報告に基いたものではなく、何れも二次的な資料に拠つて記されたものである。のみならずピュテアスの航海が前人未到の北極圏の海域に達し、またそこで目撃された現象が、古代の人々の理解を超えたものであつた為に、ポリビオスやストラボンはピュテアスを以つて大虚言者(ἀνὴρ ψευδόστατος)と呼び、彼の航海によつて伝えられた事実を虚構のこととして、故意に抹殺しようとさえ試みている。

しかしピュテアスは一介の勇敢な航海者ではなく、天文学的な観測に於いても優れた業績を残している科学者である。即ちピュテアスはマッサリアの地理的緯度を観測して北緯43°3′と云う結果を得たが(Strabo. 2.5.8)、それはアナクシマンドロスによつて発明されたと伝えられるグノモン(gnomon)を使用して行つたギリシアに於ける最初の緯度の観測であり、しかも誤差は14′に過ぎないほど正確な数値を示している。[1]

また彼はブリュターニュ半島やブリテン島の諸地点に於ける一年中の夜間の最短時間を記録しているが(Strabo. 1.18, 2.5.42)、カエサルもブリテン島に於いて「水の正確な測量」によつて夜間の時間を知ろうとした如く(Caesar. Bellum Gallicum 5.13)、ピュテアスも水時計(クレプシュドラ)(Clepsydrae)を航海に携行して、時間を測定したのであろう。一年中の昼間の最長時間を以つて緯度を決定する法は、後にヒッパルコスやプトレマイオスによつて、クリマータ(Climata)即ち緯度帯の観念としてギリシア地理学に於いて発達した。

さらにヒッパルコスは、ピュテアスの観測によれば、天球の北極には星は存在せず、北極は附近の三個の星とを以

つて画く正方形の一点に当ることを記している(Hipparch. ad Aratum 30)。天球の北極は地軸の移動によつて移動するものであり、現在の北極星に当る小熊座のα星も、真の北極とは約一度距つて居るが、紀元前四世紀の頃では、小熊座のβ星が北極に最も近く、従つて北極とほぼ正方形を画く三個の星は、小熊座のα星・β星と龍座のα星である。ピュテアスが如何なる方法でこの観測を行つたかは明かでないが、簡単な角測定器の程度のものしか存在しなかつた当時に、真の北極を決定し得るような精密な観測をなし得たことは、驚嘆に値するものと云わねばならない。

またピュテアスは斯る天文学的な観測の外に、潮汐が月の盈虚に伴つて増減する事実を発見した(Aetius. 3. 17. H. Diels. Doxographi graeci. 383)。月及び太陽の引力が起潮力となつて生ずる潮汐の現象は、地中海の如き内海では極めて微弱である関係から、ギリシア人は潮汐の現象に対しては理解に乏しく、アリストテレスは潮汐は海水が狭い海域に流入するためか、外海では風によつて起るものであると想像したのに対して(Met. II. 1. 354a)、ピテュアスの観察は全く正しいのであつた。アレクサンドロスの部将ネアルコスがインダス河口に於いて体験したように(Arrian. Indica. 22)、ピュテアスも、亦潮汐の著しい外洋の大西洋沿岸の航海に於いて、この現象を屢々体験し、観察することが出来たのであつた。

このようにピュテアスは科学史に於いて大きな業績を遺しているが、殊に地理学史に於いては、彼の北欧への航海はギリシア人のオイクメネに関する知識を拡大せしめた点に於いても重要な意義を有している。それにも拘らず、ポリュビオスやストラボンの記述に従つて、今日でもなおピュテアスに就いては過少な評価しか与えられていないので、彼に関する資料を比較することによつて、ピュテアスの航海の全貌を多少なりとも明かにしたいと思うのである。

① Hyde, W. W., Ancient Greek Mariners. 1947. p. 125.

三

アリストテレス（紀元前三八二——三二二年）の著作にはピュテアスに就いて何も記されていない。しかしアリストテレス門下のディカイアルコス（紀元前三五〇——二九〇年）はピュテアスの航海を信じ難いと看做しているにし

ても、兎も角それを知つていたとストラボンが述べていることからみれば(Strabo. 2.4.1)、ピュテアスの北欧航海はアリストテレス以後のディカイアルコスの時代、即ちアレクサンドロスのインド遠征とほぼ同時代の紀元前三三〇年前後に行われたものと推定される。また航海の目的が何であつたかは明言されていないが、ガリアを背域(ヒンターランド)に控えたマッサリアは、ギリシアの植民市のうちでも最も繁栄した一つであり、ローヌ河からライン河に通ずる交通路によつてゲルマニアからの琥珀が、またローヌ河からロアール河やガロンヌ河に通ずる交通路によつて、ブリタニアの錫がマッサリアに於いて集散された。しかし琥珀と錫、特にブリタニアの錫の貿易に於いては、古くからフェニキア人(カルタゴ)が独占的な勢力を有していたのであるから、カルタゴ人に対抗してマッサリアの経済力を発展せしめるためには、此等の琥珀や錫の産地に直接到達し得る航路を、マッサリアの市民自らの手によつて開拓することが必要であつた。従つてピュテアスの航海の目的が、マッサリアの市民の委嘱を受けて、北欧への新しい通商路の発見、開発にあつたことは想像されるのである。またポリュビオスは資力のない者が独力で斯る大規模な航海をなし得たとは信じ難いことであると看做しているが、科学者としてのピュテアスにとつても、マッサリアの経済的援助の下に、未知の地方へ探検航海を行うことは、彼の旺盛な探求心を充し得る絶好の機会であつたと考えられるのである。

さて次にピュテアスの航海が何れの地方にまで達したかを考察してみよう。前述のようにピュテアス自身の航海記録は存在しないのであるが、ストラボンによれば、彼がガリアの大西洋岸からブリタニアに向つたことは明かである。従つてピュテアスはマッサリアを出帆して、ジブラルタル海峡を通過し、イベリア半島の西岸からビスケー湾沿岸を迂回して、ガリアの西岸に達したのであろう。尤もマッサリアとカルタゴとが海上権をめぐつて敵対していたことを考えれば、カルタゴの勢力圏下にあつたジブラルタル海峡やガデスの沿岸を、果してピュテアスが無事に通過し得たかは問題であり、それ故にジーグリン(W. Sieglin)は紀元前四世紀に於けるイベリア半島へのケルト族の侵入により、イベリアのカルタゴ植民地の勢力が一時衰えた紀元前三四八——三四四年ころを以つて、ピュテアスの航海の行われ

た時期と推定している。[1] またこれに対して、錫の通商路として、ロアール河・ガロンヌ河とローヌ河とを結ぶ交通路が早くより開け、ロアール河口にはコルビロ（Corbilo）の集散市場が位置し(Strabo. 3. 177. 189)、しかもこのロアール河口からローヌ河口までの行程が三〇日に過ぎなかつたことをみれば（Diodor. 5. 22)、ピュテアスもマッサリアからガリアの西岸に達するのに、海路の迂回をとらず、直接陸路によつたとも考えられないことはない。

しかし要するにマッサリアから陸路か海路かの問題は推測の範囲をいでないので、ガリアの西岸からのピュテアスの航海に就いてみるならば、ストラボンはピュテアスに拠るところとして、オスティミ人(Ostimi)の居住地にはカペエウム（Capaeum）の半島が突出し、それより三日航程の距離を以つてウクシサメ（Uxisame）島が位置すると述べている（Strabo. 1. 4. 5)。オスティミ人はカエサルがオシスミ（Osismi）族と記している今日のブルターニュ地方に居住していた部族であるから（B. G. 2. 34)、この半島はブルターニュ半島であり、ウクシサメ島はその西端に位する今日のウエッサン（Ouessant）島である。ブルターニュ半島はガリアからブリタニアへの通路に当つて居り、カエサルも、この沿岸に居住するウェネティ（Veneti）族は航海術に極めて巧であり、皮革の帆を用いた樫船で、ブリタニアと頻繁に往来していることを記載しているが(B.G.3.13)、殊に対岸のブリテン島のコーンウォール(Cornwall)地方は錫の産地をなすため、錫の取引が盛んであり、ヒミルコのオエストリュムニデス(Oestrymnides)もウェッサン島附近を指すものと解される。(Avienus Ora maritima 113—129.)

① Sieglin, W., Entdeckungsgeschichte von England im Altertum. Verhandlungen d. 7. internationalen Geographen Kongresses. Berlin 1899. s. 816.

四

ピュテアスはブリュターニュ半島からイギリス海峡を横断してボレリウム（Bolerium）岬、即ちコーンウオールの西南端のランズエンド（Land's End）岬に到着したが、彼はブリテン島をアルビオン、或はプレタンニカ島（νῆσοι Πρεταννικαί）と呼んでいる。アルビオンは一般にはラテン語の *albus*（白い）と語源を等しくするケルト語であり、

イギリス海峡の白堊の嶮崖から白い島の意味で附せられたと云われるのであるが、アルビオンは既に前紀のヒミルコにも見えているブリテン島の最も古い呼称であり、またヒミルコの航海が紀元前五世紀頃のケルト人のブリテン侵入よりも以前に属すると考えるならば、アルビオンはむしろ先ケルト語系の言葉であると解される。これに対して、プレタンニカ、即ちブリタニアはピュテアスによつてはじめて伝えられたケルト語系の呼称であるが、カエサルが「ブリタニ人は大青（vitrum）によつて身体を染め、青色を呈しているので、それがために戦闘に於ては一層恐ろしいものに見える」（B. G. 5. 14）と記しているように、それはケルト語の *brith* or *brit*、即ち「彩色した」人の意味であるか、[1] 或は一説にはラテン語の *fretum*（海峡）と同義の「海峡の人」の意味であるとも云われる。[2]

次にピュテアスによつて伝えられたブリタニアの知識に就いて、ディオドロスやプリニウスの記述から要約してみよう。

（A）ブリテン島の形態　ブリテン島の形態は、西南端の前記のボレリウム岬と、東南端のカンティウム（Cantium）岬、即ち現在のノースフォーアランド（North Foreland）岬、及び東北端のオルカ（Orca）岬、即ち現在のダンカンスビーヘッド（Duncansby Head）岬を頂点とする三角形を呈しこの三角形の各辺の距離は、ボレリウム岬――カンティウム岬七、五〇〇スタディア、カンティウム岬――オルカ岬一五、〇〇〇スタディア、オルカ岬――ボレリウム岬二〇、〇〇〇スタディアであるから、大体三・六・八の割合となる。またブリテン島と大陸との距離は、ボレリウム岬と大陸間は四日航程であるから、一日航程を一、〇〇〇スタディアとすれば約四四〇マイル、カンティウム岬と大陸との間のガリア海峡（Fretum Gallicum 現在のドーヴァ海峡）は一〇〇スタディア、即ち一一マイルとなり、実際の距離と大差を示していない。以上のようなブリテン島の形状や位置に就いてのピュテアスの知識は、大体に於いて正しく、よくその特色を把握しているものと云える。従つて彼はその知識を実際にブリテン島を周航することによつて得たものと考えられ、また彼がブリテン島の西にイェルネ（Ierne）、即ちアイルランドの大島が存在することを知つていたのも、周航に於いてブリテン島とアイルランド

島の間のアイルランド海から、それを望見したからである。

（B）ブリテン島の大きさ　しかし問題はブリテン島の大きさである。前述のデイオドロスの著作に示された三角形の周辺の距離を合計すれば、ブリテン島の全周はほぼ四二、五〇〇スタディア、即ち約四、六八〇マイルとなり、ブリテン島の実際の全周二、三七五マイルに比して、約二倍の大きさを示している。ストラボンもこの誤謬を指摘して、ピュテアスが虚言者である一つの証左であると看做している。しかしディオドロスの示すこの数値は直接ピュテアスの原本によつたものではなく、恐らくティマイオか誰かのものから二次的に引用したものであろう。何故ならば、ギリシア時代の水路誌(Periplus)に於ける航海距離の記載は、凡て航行日数を以つて示されているから、ピュテアスも亦、ブリテン島の全周を周航に要した航行日数によつて表わしたものと思われる。そこで前記の四二、五〇〇スタディアと云う数値は、仮にティマイオスなどが当時のギリシアの船舶の航行能力からして、一日航程に当る平均航海距離を凡そ一、〇〇〇スタディアの程度であると看做して算出したものとすれば、ピュテアスのブリテン島周航日数は四二、五日となる。もちろんこの周航日数は単なる仮定に過ぎない。しかし探検航海の場合には、ネアルコスのペルシア湾沿岸航海に於けると同様に、水深の測定や航路の発見のために、平常の航行距離よりもその能力は半減する筈であるが、それにも拘らず、平常の航海距離を以つてピュテアスの原本に記された周航日数が換算されたとすれば、そのためにブリテン島の大きさが二倍も過大に誤られたのであると解することも出来るわけである。

（C）ブリテン島に関する知識　ポリュビオスはピュテアスがブリテン全島をくまなく踏破したと述べているが、それは誇張であるにしても、彼は沿岸ばかりでなく奥地の地方も訪れたとみえ、ブリテン島の住民や生活に就いて、次のような多くの事情がはじめてピュテアスによつて判明された。

(a)　ブリテン島は人口に富み、首長を有する多くの部族に分れ、彼等は戦争に於いて戦車を用うるとされているが、これはカエサルの記載するところと一致している。またその文化はまだ低く、生活も簡素であり、草葺きか丸太造りの家屋に居住するとピュテアスは伝えている。

(b) カエサルはブリテン島の住民は「多く穀物を蒔かず、乳と肉で生活し、獣皮を着する」(B. G. 5. 14) と述べているが、穀作を主としたことは考古学的な調査によつても明かであり、この点はピュテアスが正しい。しかも気候が寒冷で雨が多いために、穀物は穂付のまま穴蔵に貯蔵され、脱穀も日射に富む南欧のように戸外ではなく、納屋の中で行われる。また穀物はパンの外に、蜂蜜と混じて飲料、即ち一種のビールが作られる。但し北方に向うにつれ、牧畜や粟(燕麦?)を除いた穀物の栽培は次第になくなり、それに代つて野生の果実、蔬菜、根菜類が増加する。

(c) カエサルはカンティウム附近の住民が最も文化的であると述べているが、ピュテアスによればボレリウム岬の附近、即ち今日のコーンウォール地方が錫を産出し、錫の交易のために外国、即ち恐らくガリアからの商人も渡来するため、文化が最も進歩していると看做している。しかもディオドロスの記すところによれば、此処に産出する錫は鉱石のままではなく、鼈骨大の鉱塊とされた後、前面に横たわつているイクティス(Ictis)島、即ち現在のペンザンス(Penzance)海岸のセントマイクルマウント(St. Michael's Mount)島との間の海面が、干潮時には陸続きとなるので、荷車に積んでここに積出され、イクティス島からは船でガリアに送られ、さらに陸路三〇日を以つて、地中海沿岸のマッサリアかナルボまで輸送されたのである。これによつても明かなように、マッサリア——ロアール河口(コルビロ)——ブルターニュ半島(ウクシサーメ島)——ブリタニアの交通路が、錫の交易路として、早くから開けていたことが知られるのである。(Diodor. 5. 22)

(d) イエルネ、即ちアイルランドをピュテアスはブリテン島に劣らぬ大島であることを認めているが、彼はアイルランドに上陸していない。またディオドロスがアイルランドの文化はブリテン島に比して遥に後れ、アイルランドでは食人の風習があり、性交も無秩序に乱婚の状態で行われていると述べているが、その知識は恐らくピュテアスがブリテン島で伝聞したところに基くものであろう。カエサルはブリテン島に於ても、兄弟や父子の間には妻の共有が認められると述べている(B. G. 5. 14)

(e) ヒッパルコスはクリマータの作成に当つて、ブリテン島に就ては、ピュテアスが測定した一年中の夜の最短時間、従つて昼の最長時間を利用したのであるが、昼の最長時間一八時間の地点は北緯五七度、一九時間の地点は北緯六〇度に当るから、ブリテン島の北部及びシェットランド諸島に於ける観測によつたものと考えられる。従つてピュテアスはブリテン島を周航した

ばかりでなく、オークニ諸島から更にシェットランド諸島にまで航海を行つたことは明かである。

(f) プリニウスはピュテアスによつて、ブリテン島の沿岸では、大潮の際に海面が八〇キュビット上昇すると述べている。（H. N. 2. 99）ローマの一キュビットは一七・五インチ（四四・三六センチ）であるから、八〇キュビットは一一六フィート八インチに当る。このような大規模な大潮は考えられないから、プリニウスの数値は明かに誤りである。しかしスコットランドの北岸とオークニ諸島との間のペントランド湾（フィアース）（Pentland Firth）は、潮汐の著しいことを以つて知られ、大潮時には海面は一〇―一二フィート上昇することからみて、ピュテアスはブリテン島周航に際して、スコットランドの北端にまで達し、この大潮の現象を目撃したと推定され、前記の月の盈虚と潮汐の関係を観察し得たのであろう。

① W.Smith., Classical Dictionary. 1868. P.148

② Encicl.Ital. Britannia の項

五

ストラボンは「ピュテアスはガデイラ（Gadeira）からタナイス（Tanais）までのヨーロッパの全海岸を訪れたと云つている。」（Strabo. 2. 4. 1）が、「レーヌス（Rhenus）河（現在のライン河）からスキュティアに及ぶ地方に就いて、ピュテアスが物語るところは凡て偽りである」と述べている。タナイス河はヘカタイオスやヘロドトスにもみられるように、アゾフ海に注ぐ現在のドン（Don）河であるが、この場合のタナイスはドン河のことではなく、タナイス河が一部は北方にも流れるものと想像して、北海、バルト海に注ぐ北ドイツの河川の何れかを指したのか、或はタイナス河は古代にはアジアとヨーロッパの境界に当ると考えられていたから、アジアとの境界に近いヨーロッパの東方の土地を表わしたものと思われる。従つて「ガデイラからタナイスまで」とは、イベリア半島南端のガデスから、北ヨーロッパに亘る沿岸全体を意味しているのである。またスキュティアも黒海北岸の地方を云うのではなく、まだピュテアスの頃には、ガリアから以東の地方に対してゲルマニアの名称は用いられていなかつたから、ゲルマニアを含めて北ヨーロッパ一帯がスキュティアと呼ばれたのである。

しかし何れにしても、ストラボンはポリュビオスに従つて、ピュテアスのゲルマニア沿岸の航海を信頼し難いもの

と看做しているが、ピュテアスが錫の産地のブリテン島から、更に琥珀の産地のゲルマニアに探検航海を試みたことは、他の資料から推定される。そこで先ずプリニウスの著書から、これに関連する部分を引用すれば、

「ピュテアスの言によれば、メトゥオニス（Metuonis）と称する六、〇〇〇スタディアの延長を有する低湿な海岸（aestuarium）には、ゲルマニア人のグイオーネス（Guiones）族が居住する。それよりアバルス（Abalus）島までは一日航程である。この島では春になると、凍結した海（mare concretum）から洗い出された琥珀が、波浪によつて打ち上げられる。住民はそれを薪の代りに用い、またそれに隣るテウトニー（Teutoni）族に売る。ティマイオスもこのことを信じているが、この島をバシリア（Basilia）と呼んでいる。」（H. N. 37. 2. 11.）

またプリニウスの他の箇所には次のようにある。

「ティマイオスによれば、無名の多くの島があるが、その中の一島はバウノニア（Baunonia）と云い、スキュティアの沖合の一日航程のところにあり、春には波浪によつて琥珀が島に打ち上げられる。……ランパスコス（Lampascus）のクセノポーン（Xenophon）によれば、スキュティアの沿岸から三日航程のところに、バルキア（Balcia）と云う大きな島があり、ピュテアスはそれをバシリア（Basilia）と呼んでいる。」（H. N. 37. 2. 11.）

さらにディオドロスの著書から同様な記載を引用すれば、

「ガラティア（Galatia＝ガリア）の向うのスキュティアの丁度対岸には、海洋の中にバシレイア（Basileia）と称する島がある。この島には波浪によつて大量の琥珀が打ち上げられるが、琥珀は世界中にはここより外には産しない。……琥珀は上記の島で採取され、住民によつて対岸の本土に搬出され、そこからわれわれのところに送られて来るのである。」（Diodor 5. 23.）

以上を比較するならば、プリニウスは屢々無批判に資料を引用し、矛盾した記述を行うことは稀でないから、琥珀を産する島に関しても、プリニウスの島名や航程距離の記述には多くの矛盾がみられる。しかし少くともプリニウスやディオドロスによれば、「波浪によつて打ち上げ」られる琥珀を産出する島が、スキュティア、即ちゲルマニアの沿岸から一日、或は三日航程の距離に存在している点に於

いては一致して居り、プリニウスもディオドロスもこの琥珀の島に就いての知識を、ピュテアス自らの報告に基いて書かれたと思われるティマイオスのものから、引用したのであることは推定される。従つてピュテアスのバシリア島と、プリニウスにアバルス、バウノニア、バリキアなどと記された島とは、その記載からみて別個の島ではなく同一の島であることが知られる。ただ何故島名にこのような混乱が生じたかは明かでないが、プトレマイオスがユトランド(Jutland)地方に居住する部族名として挙げているサバリンギー(Sabalingii)とアバルスとが多少類似していることからみて、アバルスか或はそれに近い名称を以つて呼ばれていた島に対して、バシリアとは即ち、ピュテアスが「王の島」の意味を以つて、ディオドロスにみられるようにバシレイア(*Βασίλεια νῆσος*)とギリシア語を以つて附した呼称であるとも解される。

それは兎も角として、ピュテアスが到達したのが、スキュティア、即ちゲルマニアの沿岸であるとしても、バルト海に面する沿岸か、北海に面する沿岸かが決定されねばならない。

そこで先ずバルト海説についてみれば、現在なお琥珀の産出に富むのは、ヴァイクセル(ヴィストゥラ)(Weichsel. Vistula)河の注ぐバルト海のダンツィヒ(Danzig)湾沿岸である。それ故にプリニウスがゲルマニアの一部族として記しているグイオーネスは、タキトゥスがヴァイクセル河下流に居住する部族として挙げているゴトーネス(Gotones＝ゴート族)(Ger. 44)に当るものである。また前記のストラボンの「ガデイラからタナイスまで」という言葉のタナイスも、ドン河の位置からみてヴァイクセル河を指しているのであり、或はバシリヤやバリキアがバルティア(Baltia)、即ちバルト海の名称と関連するものであると解すれば、ピュテアスはバルト海に入り、ダンツィヒ湾沿岸附近まで来航したと云うのがバルト海説の主張するところである。しかし若しピュテアスがバルト海まで達したのであるとすれば、ユトランド半島、即ちキンブリー半島(Chersonesus Cimbrica)の沿岸を北上して、これを迂回しなければならなかつた筈であるが、プリニウスやディオドロスなどの記載には全くそれが見当らないし、またバルト海に入るには、シェールランド島、フェールランド島などの大きな島嶼の

沿岸を通過しなければならないのに、島嶼としてバシリア島しか記載されていないのも、実際と全く符合しないことである。

これに反して北海沿岸と看做せば、より多くの蓋然性が見出される。先ずプリニウスの云うグイオーネスであるが、それはタキトゥスが「大洋(北海)に最も近い」ところに住むと記しているインガエウォーネス(Ingaevones)族(Ger.2)に当るものと考えられる。しかもこの北ドイツの北海沿岸は、潮汐の干満によつて汀線の変化の著しい低湿な海岸であるため、プリニウスは前述の如くこれをaestuariumと云う言葉を以つて表現しているのであり、その名称のMethonisがフリースランド語のmedenや英語のmeadowと関連するものとすれば、海岸の沼沢性の草地を意味するものと解される。

従つてピュテアスのバシリア島は沿岸から約一日航程の距離のヘリゴランド(Heligoland)島であり、ストラボンの云うタナイスも、それを河川であるとすれば、エルベ河を示すものと云える。尤も現在のヘリゴランド島には琥珀を産出しないが、琥珀を含有する第三紀層は、ユトランド半島西岸一帯の基盤を構成しているばかりでなく、海蝕を受け易いため、過去のヘリゴランド島は現在よりも遙かに大きな島嶼であつたに違いないから、ピュテアスが到達した琥珀の産地は、ヘリゴランド島からユトランド西岸のハリゲン(Halligen)諸島にかけてであつたと思われる。それを示すいま一つの論拠としては、プリニウスが他の箇所に於いて、「ブレタンニアから反対のゲルマニア海の方向には、グラエシアエ(Glaesiae)諸島が散在しているが、ギリシア人は近年この諸島を、ここに産出する琥珀のギリシア語を以つて、エレクトリデス(Electries)と呼んでいる。」(H. N. 4.94)と記している。glaesum, glesumとはタキトゥスが述べているように(Ger.45)、琥珀に対するゲルマニアの名称であり、琥珀の光沢が輝きを有することから、「輝く」或は「ガラス」を意味する英語のglare, glassドイツ語のGlasなどの言葉も、これから派生したのである。

六

ピュテアスは錫の産地のブリタニア、琥珀の産地のゲルマニアの沿岸を訪れたばかりでなく、彼はさらにトゥーレ(Thule)にも航海を進めた。しかしストラボンやプリニウ

スなどにみられるトゥーレの記述は、極めて漠然たるものであり、殊に北極圏に近い北方の世界に就いての知識の乏しかつた古代の人々にとつては、ピュテアスによつて伝えられたトゥーレは理解し難いものであつた。それ故に、ポリュビオスやストランボは、トゥーレはピュテアスによつて作為された仮定の物語であるとして、その存在を否定して居り、またエラトステネス・ヒッパルコス・プリニウス・プトレマイオスなどは、トゥーレを一応実在するものとなしているが、その位置を何処に求めるかは決定し難かつた為に、古代ではトゥーレの存在を肯定するとしても、ヴィルギリウスが「さいはてのトゥーレ」*ultima Thule* と詠つているように（Georg. 1. 30）、それはただ世界の最北のところに存在すると想像された半ば伝説的な土地であると看做されたのである。

しかしピュテアスがトゥーレに実際に到達したものとすれば、このトゥーレが果して何れの地方をさすものであるかが考察されなければならない。

そこで先ずストラボンの著作のうちから、トゥーレに関する記載を要約するならば、トゥーレはブリタニアの北方の六日航程の距離にあり、その附近には凍結した海が存在し（Strabo. 1. 4. 2.）、トゥーレでは夏至の回帰圏と北極圏とが一致する（Strabo. 2. 5. 8.）。またトゥーレでは家畜や果樹に乏しく、住民は主に粟（燕麦？）か蔬菜・根菜類か野生の果実を食とし、穀物と蜂蜜から一種の飲料が作られるが、雨が多く、日照の不足する土地であるので、穀物は納屋に貯えられ、脱穀は屋内で行われる（Strabo. 4. 5. 5.）。

以上のストラボンの記述に就いて若干の説明を加えれば、ここに云う北極圏とは、北極星を中心にして廻転する星座のうち、水平線下に没することなく常に見える星座が占める天球の部分を云うのであるから、地中海沿岸のギリシアに於ける北極圏は、北極星を中心とする大熊座までの天球の部分に当つている。従つて北極に進むに伴つて、水平線下に没しない星座は益々多くなり、この北極圏に当る天球の部分は拡大されるのであるが、その拡大される割合を、天球の北極からの度数を以つて表せば、それぞれの観測地点の緯度と対応するのである。即ち北極に於ては、北極圏は天球の赤道と一致し、天球の北極からの度数は、緯度と同じく九〇度となる理であるから、トゥーレに於いて夏至

の天球の回帰線と北極圏と一致するとすれば、その地点の緯度は、九〇度から回帰線の二四度（ギリシア時代には二四度と看做されていた）を減じた北緯六六度に当るのである。またトゥーレの住民の生活に就いてのストラボンの記述は、前記のブリテン島の住民に就いてのディオドロスの記述と極めて類似して居り、従つてピュテアスが地中海沿岸と比較して、北欧の住民の生活を一般的に物語つた言葉が、ストラボンによつてトゥーレ、ディオドロスによつてブリテン島の住民の生活を示すものとして記載されたのであると考えられ、何れにしても、ブリテン島もトゥーレも、住民の生活状態は大体類似していたものと思われる。

次にプリニウスに就いてみれば、ブリタニアの北方に連る諸島のうちの最大のベリーケ（Berrice）と呼ばれる島がトゥーレへの出発点に当ると記されているが、このベリーケはその位置からみて、今日のシェットランド諸島のメインランド（Mainland）島に比定し得るのである。トゥーレに就ては、プリニウスはトゥーレでは太陽が獅座を通過する夏至の日には夜がなく、反対に冬至の日には昼がないと述べているが、それは明かにトゥーレが北極圏に位置していることを意味している。またプリニウスもストラボンと同様に、トゥーレから一日航程のところに結氷している海があり、それはクロニア（Cronia）海と呼ばれると記している（H. N. 4. 104.）。

さらにロードスのゲミノスの著作にみられる一文は、ピュテアスの「大洋に就て」よりの直接の引用を示す唯一のものとして注目さるべきであるが、それによれば、「土人達はわれわれに太陽が憩う地点を指し示したが、そこでは夜が或るところでは二時間、他のところでは三時間と云うように非常に短く、従つて太陽は没したかと思うと、すぐまた昇つて来るのである。」と記されている（Geminos. 6. 8〜9.）。この土地がトゥーレであることは、プリニウスの記述と比較しても推定されるのである。また地球は球体でなく、平たいものと考えられていた未開人や古代人の間では昼間には天空を運行していた太陽が、大地の蔭に姿を没して休息するために夜となるのであると云う考えが多くみられ、中世の地理学者コスマス（Cosmas）も亦、このような素朴な宇宙観を述べている（Topographia christ. 2. 149）。それ故にトゥーレの住民がピュテアスに示した「太陽が憩

う地点」の意味も、夏に短時間太陽が没する場所か、それとも冬至の日には太陽が廿四時間全く姿をみせない場所か、何れかを表わした言葉であり、何れにしてもその場所が北極圏に位置するものと解され、また夏の夜が二時間、及び三時間の地点を緯度を以つて示せば、北緯六四度三〇分と六三度三〇分に当るのである。

要するに此等のストラボン・プリニウス・ゲミノスの記載するところから、トゥーレの位置を考えれば、トゥーレはブリテン島の北端から北の方向に六日航程の距離にあり、北極圏に接し、結氷している海を近くに控えていることが知られるのである。

そこでこれまで多くの人々によつてトゥーレと比定されたシェットランド諸島・アイスランド・ノルウェーの三つの地方のうち、何れが此等の点に於いて最も該当するかを、次に考察してみよう。

（A）シェットランド諸島　前述の如くストラボンはトゥーレはブリタニアの北方、或はブリタニア諸島の最北と記していることからして、ブリテン島の北に連る諸島の最北はシェットランド諸島である。またプトレマイオスもシェットランド諸島の位置に当るオルカデス（Orcades）諸島の北のところにトゥーレを位置せしめて居り、タキトゥスも「アグリコラ」に於いてオルカデス諸島を叙した後に続いて、「遙か遠方にはトゥーレもあると云われたが、冬の雪でまだ隠されていた。」（Tacitus. Agricola.10）と記している。しかし前述の如くピュテアスはシェットランド諸島には、別にブリテン島の周航の際に訪れたと考えられるばかりでなく、むしろプリニウスにみられるように、シェットランド諸島の主島メインランドはピュテアスのトゥーレへの出発点であると看做され、また事実シェットランド諸島はスコットランドの北端から六日航程の距離にもなく、緯度から云つても北緯六〇―六一度であり、北極圏にはなお遠く隔つている。

（B）アイスランド　前述の如くストラボンによれば、トゥーレはブリテン島の北に位置していることとなるが、ストラボンはまたイェルネ、即ちアイルランドもブリテン島の北に存在するものと看做しているから、厳密にこれを真北の意味に解さなければ、ブリテン島の北西の方向の北極圏に接する位置にはアイスランド島があり、アイスランド

とグリーンランドの間のデンマルク海峡の大部分の海面は常に凍結している。しかしアイスランドはブリテン島から六日航程以上の距離にあり、しかもアイスランドに向うには、偏西風やメキシコ湾流とは逆航の関係になる。のみならずピュテアスのトゥーレには既に農業を営む住民が多く居住しているのに対して、アイスランドは久しくオイクメネに属しない無人島であり、同島の発見と最初の移住は、漸く紀元八世紀頃にアイルランドの修道士等によつて行われたのである。

（C）ノルウェー　ブリテン島から北に進路をとつたとすれば、風向や海流からみて、北西よりは北東に向うのが自然である。そこでプリニウスのベリーケ島、即ちシェットランド諸島のメインランド島から北東の方向へ六日航程の距離に当るところは、今日のノルウェーのオーレスンド（Aalesund）からクリスティアンスンド（Kristiansund）にかけての沿岸であり、緯度から云えば北緯六三度乃至六四度、即ち夏の時間は三時間乃至二時間のところである。またこの沿岸からヘルゲランド（Helgeland）の沿岸を北上すれば、直ちに北極圏に達することが出来る。しかもストラボンの記載がトゥーレの住民の生活を正しく伝えているものとすれば、土地の極めて狭少なノルウェーの沿岸には、現在でも家畜の飼育は殆ど行われず、農業は燕麦・小麦の穀作を主とし、また養蜂は気候の関係からアイスランドでは不可能であるが、ノルウェーの沿岸では北方まで拡つている。

尤もノルウェーの沿岸はメキシコ湾暖流の影響によつて、高緯度にも拘らずこの様に気候が温暖であり、従つてアイスランドと比較すれば、北極海の積氷（パックアイス）の限界は勿論、流氷（フロアイス）の限界もなお沿岸から遠く隔つているが、ストラボンやプリニウスが言うところの「結氷している海」を冬季の結氷現象を意味していると解すれば、ノルウェー沿岸でも、北極圏附近の峡湾（フィーヨルド）では、冬季には海面の凍結が認められる。またストラボンが「トゥーレと云う名の島」と記しているように、ピュテアスによつて伝えられたトゥーレは島嶼であるとされているが、しかしスカンジナヴィアのことを最初に記載したポンポニウス・メラも、これをコダノヴィア（Codanovia）島と称し、プトレマイオスも亦スカンディア（Scandia）島と記しているように、ローマ時代でも、

スカンディナヴィアは半島でなく島嶼であると考えられていたのである。

以上の諸点から考察するならば、ブリテン島の北に位置するピュテアスのトゥーレとしては、シェットランド諸島やアイスランドに比較して、ノルウェーの北西沿岸が遙かに蓋然性に富むものと考えられ、おそらくピュテアスはノルウェーの沿岸を北上して、北極圏を越え、今日のボデ(Bodö)の附近まで到達したものと推定される。

七

ピュテアスのトゥーレが仮定の伝説的な土地であると考えられるようになつたのは、古代の人々の北極圏に対する知識が乏しかつたばかりでなく、ストラボンを通じて伝えられたトゥーレの附近の状態が極めて幻想的な表現のものであつた為、それが人々の懐疑心を一層換起することとなつたのであろう。即ちストラボンの著書から、その一節を引用するならば、

「トゥーレやその附近に就いてピュテアスの物語るところに附言すれば、そこではもはや所謂陸や海や空気は存在せず、凡そ此等の要素が混合した、海の肺に似た(πνεύμονι θαλασσίῳ ἐοικός)物質があり、その中に陸も海も凡ゆる要素が漂つて居り、またそれは凡てがくっついたように固着して、徒渉することも、船で通ることも出来ないと云うことである。しかしピュテアスは、この海の肺に似たものを彼自身目撃したと称しているが、その他のことは凡て伝聞によるものであると述べている。」(Strabo. 2. 4. 1.)

この一節が如何なる光景を表現したものであるかを理解することは困難であるが、先ず彼自身が目撃したと云う「海の肺に似た」ものとは何を意味しているのであろうか。「海の肺」、即ち πνεύμων θαλάσσιος, pulmo marinus とは、テオフラストスやプリニウスにもみえているように、ギリシアでは一般にクラゲを意味している。従つてピュテアスのこの言葉は、クラゲが多数海面に浮遊している状態であるとか、或はクラゲが燐光を発することから、燐光色に輝く海面を示しているのであると解され、またそれに対して、クラゲではなく肺臓に比喩した言葉であるとして、肺臓のような軟い海綿状の物質と云う意味で泥状の流氷や氷塊を表わしたものであるとか、或は海面か砂洲の上を覆

う低い海霧の形が、人間の肺臓の形態を髣髴たらしめたからであるとか、また干潮時に於ける砂洲の上に残る水脈の形態が、肺臓の血管の毛細管的組織と類似している意味であるとか、種々の解釈が加えられている。

しかし問題は、むしろ陸も海も空もが混沌とした状態をなしていると云うトゥーレの幻想的な光景が何を示しているかである。前述の如くストラボンやプリニウスはトゥーレの近海には氷海が存在することを記しているが、さらにソリヌスは「トゥーレの向うでは、不活潑な凝り固つた海（Pigrum et concretum mare）がある。」と述べている（Solinus. 22. 11.）。然るにこのソリヌスと同じような表現が、タキトゥスの「アグリコラ」に於けるブリテン島北部の海に就いての叙述にもみられ、「海は不活潑に粘り、撓を操るのに重くして、如何なる風にも波立つことがない。」と記されている（Tacitus. Agricola. 10）。またタキトゥスは「ゲルマニア」に於いても、バルト海の状態に就いて、「スイーオネース（Swiones＝スカンジナヴィアのバルト海沿岸に居住する部族）の向うに、不活潑にして、殆ど動かないいま一つの海がある。」と述べ、さらにそれに続いて、「全世界の周囲はその海の包むところであると信ぜられるのは、すでに没しつつある太陽の最後の光輝が、星の光を鈍らすばかり煌々と日の出まで打ちつづくがためである。のみならず、水から登る太陽の音が聞え、馬の姿や〔太陽神の〕頭光がみられることも、一般にまことらしくつけ加えられている。」と記している（Tacitus. Germania. 45. 田中・泉井氏訳による）。

このタキトゥスのスイーオネースの海の叙述にみられる極めて幻想的な表現は、極光（オーロラ）の光景を描写したのではない。古代にはホメロスにもみられるように、世界の周囲は大洋（オーケアノス）を以つて繞らされ、世界の西端の大洋に没した太陽は、夜には世界の北端を通つて再び世界の東端の大洋から昇るものと考えられていたから、世界のはてである大洋の極限に当るところでは、世界を円蓋の如く覆つている天空と大地と海とが結合するところであると想像されていた。従つてタキトゥスの叙述が、このような素朴な宇宙観――タキトゥス自身がそれを信じていたか否かは別として――を表したものとすれば、ピュテアスの、トゥーレに於いては陸と海と空とが混在していると云う幻想的な

描写も、ピュテアスが素朴な宇宙観しか持つていないトゥーレの住民から彼が伝聞した、空想的な世界のはてを表わした言葉に過ぎないと云う見解もみられる。

しかしストラボンやプリニウスがトゥーレの近海には氷海が存在することを記していることからみて、このストラボンにみられるトゥーレの附近の叙述も、海面の凍結状態を表現したものであると解される。即ち海面の凍結現象に就いて宇田道隆氏の著書から引用するならば、

「海水が冷却されてその含有する塩分に相当する結氷点迄温度が降ると始めて氷結する。始め薄くて細長い針状か小さい板状の氷の結晶が出来、海面をみると油膜でも張つたようで、その氷は飴状か膠状とでも形容したいような粘り気のあるものであるが、それが次第に微晶が密にくつつきあうためであろう、ザクザクしたアイスクリーム状のものに変つて行く。遠くから見ると灰色か鉛色を呈し、風による漣は消えるがウネリの形は伝える。櫓櫂で漕いでも甚だ抵抗が多くて著しく速度を減される。充分冷えた海に雪が降り込んでも矢張り同様な氷粥状のものが出来る。このアイクリーム状のものが少しづつ固まつて氷の皮殻のようなものが出来、厚さは五糎以下であるが、……この時少し波風があつて温度が下降すると板状に発達した氷がこわれて所々に円盤状に塊つて丁度池の水面に睡蓮の葉が浮いているように見える。これをパンケーキ・アイス（餅氷）と云う。」（海（岩波新書）七五―七六頁）

これを前記のストラボのトゥーレ、或はソリヌスやタキトゥスの記載するところと比較するならば、海面は膠状を呈して波浪がなくなり、櫓櫂を動かし難くなるなど、多くの点に於いて一致がみられる。従つてピュテアスによつて伝えられたトゥーレの周辺の海の状態は、決して空想的な表現ではなく、陸も海も空も混在してみえるのは、北海特有の濃霧に包まれた、冬季のノルウェー沿岸に於ける海面の凍結状態を表わしたものであると解され、海上に白く無数に浮ぶパンケーキ・アイスを、ピュテアスはクラゲに似たものと称したのであろう。

八

以上にみられるように、ピュテアスは既に紀元前四世紀に、ギリシア人にとつて殆ど知られていなかつたブリテン

島から北ドイツやノルウェーの沿岸を、独力で以つて航海を試みた偉大な探検家であり、また北欧に就てのすぐれた新しい知識を伝えた。それにも拘らず、彼が多くの人々に虚言者とし誤解されたのは、一つにはポリュビオスや、ポリュビオスによるところの多かつたストラボンが、ピュテアスによつて齎された知識を故意に抹殺しようと試みたからである。それはポリビュオスは将軍スキピオの友人として、数次に亘るローマ軍の遠征に従軍し、西アフリカ沿岸の探検航海を行い、常に誰よりも広い地域に及んだ旅行家であることを誇りとしていたのであるが、ただ北欧に就いては、ポリュビオスは僅かガリアの南部を訪れたのみであり、それ故に彼よりも二世紀以前に、ピュテアスがガリアから北極圏にまで達する北欧を航海した事実に対して、ポリュビオスは彼の自尊心から悪意を抱いたのである。

また一つには北欧に就いてのギリシア人の有していた知識が極めて限られていたからである。ギリシア人が地中海から北方への地方として知つていたのは、黒海北岸のスキュティア地方であるが、スキュティア地方から北に向えば、気候は益々寒冷となり、また当時はロシアの平原は人跡を殆どみない土地であつた。従つてギリシア人は地球を寒帯・温帯・熱帯に区分しているが、人間の居住の可能な世界、即ちオイクメネは温帯に限られ、熱帯の酷熱に対して、北極圏より以北の寒帯は、酷寒の故に人間の居住は全く不可能であると看做していた。然るにピュテアスの訪れた大西洋に面する北欧の沿岸では、メキシコ湾暖流の影響によつて高緯度の地点でも温暖であり、ノルウェーの沿岸では北極圏を越えた北緯七〇度の地方まで居住も穀作も可能であるが、メキシコ湾暖流の存在を知らなかつたギリシア人にとつては、ピュテアスが北極圏下のトゥーレに到達したこと、しかも其処では住民も多く、農業が営まれていると云うことは信じ難いことであつたから、ピュテアスによつて伝えられた知識も、凡て虚構であると看做されたのである。

（あとがき）原稿執筆中に病床についたため、本文や引用文献の校訂を充分になし得ず、杜撰な形のままで発表したことをお許し願い度い。（筆者）

Pytheas and Thule

By

T. Oda

Although Pytheas of Massalia was an excellent scientist, the greatest deed he performed was the exploration around northern Europe which had hardly been known to the Greeks and thus the new addition to their geographical knowledge. This expedition of his by ship was accomplished as early as the expedition of Alexander the Great into India. His main purposes then were to open the way for the trade of amber in competition with the Carthaginians and to explore the northernmost part of the world. Leaving the Atlantic coast of Gallia, he reached Britain Island, which produced tin. After going round the island, he visited the North Sea coast of Germania productive of amber. Finally he journeyed as far as Thule of the Arctic circle. Thule is supposed to have been located along the northwestern coast of present Norway. Though there are various interpretations of the illusory description of Thule area by Strabo, it seems to be the designation of the frozen sea covered with dense fog. However, the discovery of the area by Pytheas was too new to be understood by people, and Strabo and Polybius called him a liar.